

## (7) 2014 年度 中期留学第 13 期生の選抜時と帰国後の英語力分析

中期留学委員長 笠原正秀

### 0 はじめに

---

本稿では、2014 年度中期留学第 13 期生（以下、13 期生と記す）の選抜時と帰国後の英語力の変化を、学生たちが 2013 年 12 月<sup>1)</sup>に受験した TOEIC IP（以下、TOEIC<sup>2)</sup>と記す）と帰国後の 2015 年 5 月に受験した TOEIC の得点を分析することで、その変化を検証する。最初に、13 期生全体の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別（リスニング・リーディング・合計、以下 TOEIC における項目とはこれらの 3 項目を指す）平均値から、13 期生の英語力の全体的な傾向を把握する。次に、中期留学（英語圏）協定校 5 校<sup>3)</sup>、留学先別に TOEIC の各項目に見られるスコアの変化を分析する。3 点目に、選抜時と帰国後の TOEIC のスコアの伸びを 13 期生全体と各留学先別に検討する。最後に、選抜時の TOEIC の各項目のスコアと帰国後の TOEIC の各項目のスコアの、それぞれ対応する項目間の相関について検討する。以上、4 つ観点から 13 期生の選抜時と帰国後の TOEIC のスコアを分析し、13 期生の英語力の変化と現状を議論する。

### 1 13 期生全体の TOEIC の各項目別平均値——選抜時と帰国後——

---

本項は、13 期生全体の選抜時（2013 年 12 月）と帰国後（2015 年 5 月）に受験した TOEIC の各項目別平均値を統計的に分析し、議論することを目的とする。13 期生全体の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別平均値の結果は以下に示す表のとおりであった（表

---

<sup>1)</sup> 本学部の英語履修者の 1 年次の必修科目である Communicative English の成果を確認するために実施している TOEIC IP の結果を、中期留学を希望する学生の選抜資料の一部（基礎的な英語力の有無の確認）として利用している。

<sup>2)</sup> TOEIC 実施団体である EST TOEIC によれば、「TOEIC（トーイック）とは Test of English for International Communication の略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストです。」（<http://www.toeic.or.jp/toeic/about/what.html>）ということである。TOEIC には公開テストと IP があり、本学部の留学プログラムでは IP を利用している。IP とは実施企業・団体・学校などで任意に日時・場所を設定し、受験できる制度のものである（<http://www.toeic.or.jp/corpo/faq/before01.html>）。

<sup>3)</sup> 本稿で分析しているデータにヴィクトリア大学ウェリントン校のデータは含まれていない。ヴィクトリア大学ウェリントン校は、2012 年度より、最初から学部入学もしくはファウンデーションコースの履修を目指す 10 か月プログラムとなったため、本稿執筆時（2015 年 8 月）において、帰国後の英語力の伸長を測るための TOEIC の受験がなされていないためである。そのため、本データの対象者数は 25 名となっている。ヴィクトリア大学ウェリントン校の学生も含めると、2014 年度の中期留学生の数は 30 名となる。

1. および表 2.)。選抜の段階において、各項目スコアの平均値はリスニングが 291.20 点（最大値 360 点；最小値 230 点）、リーディングが 207.80 点（最大値 310 点；最小値 155 点）、合計が 499.00 点（最大値 630 点；最小値 405 点）であった（表 1.）。

表1. 選抜時の TOEIC の各項目の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
選抜時のリスニング	230	360	291.20	38.004
選抜時のリーディング	155	310	207.80	41.959
選抜時の合計	405	630	499.00	61.543

(N=25)

選抜段階における13期生の TOEIC による英語力は以下のように見ることができる。合計の499.00点（約500点）というレベルは、「人材育成における英語に関する調査 TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2014」によれば、企業の期待する新入社員の英語力の平均（507点）に相当する<sup>4)</sup>。個別の項目については、リスニングの291.20点（300点弱）というレベルは「TOEIC プログラム各スコアと CEFR<sup>5)</sup> レベルの比較表<sup>6)</sup>」を見ると、B1 [Independent User] [中程度] に該当する。また、同表によれば、リーディングの207.80点（200点強）というレベルは、A2 [Basic User] [初心者レベルの上] に該当する。リスニング（聴く力）、リーディング（読む力）ともにまだまだ発展途上のレベルではあるが、その中でもリーディングに関しては、力不足が際立っていることがわかる。ただ、この傾向は、例年、中期留学生に共通した傾向でもある（e.g., 2013年度中期留学生 [12期生] の選抜時のリーディングのスコアは186.46点、2012年度中期留学生 [11期生] の選抜時のリーディングのスコアは209.15点<sup>7)</sup>、CEFR の基準ではともにA2 [Basic User]）。つまり、本学部の学生の英語力の弱点ということができる。

表2. は13期生の帰国後の TOEIC のスコアである。各項目とも選抜時から比べ、平均値が大きく伸びていることがわかる。各項目の平均値は、リスニングが370.20点（最大値450点；最小値285点）、リーディングが310.40点（最大値415点；最小値235点）、合計が680.60点（最大値865点；最小値565点）であった。前出の「企業が期待する TOEIC スコアとビジネスパーソンの平均スコア」を参照すると、合計の680点というレベルは、企業の海

<sup>4)</sup> 企業が期待する TOEIC スコアとビジネスパーソンの平均スコア, <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>

<sup>5)</sup> Common European Framework of Reference for Languages（ヨーロッパ言語共通参照枠）の略称。EUとなり、ヨーロッパ地域での人口の流動化にともない、個々人の持つ適正な言語運用力評価をヨーロッパ統一基準で測るために作られた枠組みで、A1 (Basic User) から C1 (Professional User) までの5段階にレベル分けされている（TOEIC プログラム各スコアと CEFR レベルの比較表, <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>）。

<sup>6)</sup> <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>

<sup>7)</sup> ここで紹介している第11期生、第12期生のリーディングのスコアについても、ヴィクトリア大学ウェリントン校に留学した学生のデータは入れずに算出したものになっている。

外部門にいる人材に期待される TOEIC の平均値に該当する。個別の項目については、リスニングの370.20点というレベルは、前出の「TOEICプログラム各スコアとCEFRレベルの比較表」を参考にすると、B1 [Independent User]（中程度）に該当する。また、リーディングの310.40点というレベルも B1 [Independent User]（中程度）に該当する。約半年間の留学期間を経て、リスニング、リーディングの両技能とも B1 [Independent User]（中程度）に達することができた。リスニングに関しては、選抜時から CEFR の枠組みの中では B1 [Independent User]（中程度）の区分に入っており、帰国後にはその区分を超え、B2 [Independent User]（上）に入ることを目指したいところではあったが、残念ながらそのレベルに達することはできなかった。しかし TOEIC のリスニングのスコアとしては、選抜時よりも79点伸ばすことができている。またリーディングに関しては、選抜時から比べると、スコアとしては102.6点伸ばしており、CEFR の枠組みの中でもワンランク上のレベルに達することができた。

表2. 帰国後の TOEIC の各項目の記述統計量<sup>8)</sup>

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
帰国後のリスニング	285	450	370.20	33.432
帰国後のリーディング	235	415	310.40	45.596
帰国後の合計	565	865	680.60	67.335

(N=25)

中期留学により、学生たちのリーディング（読む力）の強化が図れたことは特筆すべき点といえる。前出同様、過去2か年の中期留学生（11期生と12期生）の帰国後のリーディングのスコアを見ても、11期生が295.56点、12期生が286.04点にまでスコアが伸びており、ともに CEFR の B1 のレベルに達している。また、リスニングの標準偏差が選抜時に38.004だったものが帰国後は33.432になっており、選抜時に比べ帰国後は4.572も数値的に小さくなっている。これは半年間の留学を経て、リスニングの力が全体的に同程度のレベルにまとまってきたと考えられる。しかし、対象者数が少ないことをかんがみると、数値的には誤差の範囲内と考えることもできる。

こうした13期生全体の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目のスコアに見られる変化は統計的にも有意であるのかを検証するために  $t$  検定を行った（表3.）。その結果、リスニング、リーディング、合計のすべての項目において有意な差のあることが確認された、リスニング： $t=10.471, df=24, p<.001$ ；リーディング： $t=11.358, df=24, p<.001$ ；合計： $t=16.488, df=24, p<.001$ 。

<sup>8)</sup> 選抜時より標準偏差の値が小さくなったものにはマーカーをつけた。

表3. 選抜時と帰国後の各項目の t 検定結果

	対応サンプルの差							
	平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間		t 値	自由度	有意確率 (両側)
				下限	上限			
帰国後 リスニング- 選抜時リスニング	79.000	37.722	7.544	63.429	94.571	10.471	24	.000
帰国後 リーディング- 選抜時リーディング	102.600	45.165	9.033	83.957	121.243	11.358	24	.000
帰国後 合計 - 選抜時合計	181.600	55.070	11.014	158.868	204.332	16.488	24	.000

本項では、13 期生全体の選抜時（2013 年 12 月）と帰国後（2015 年 5 月）に受験した TOEIC の各項目別平均値を統計的に分析し、議論を展開してきたが、選抜時と帰国後において、たしかに TOEIC のスコアを伸ばしている、言い方を変えれば、TOEIC という基準で見た場合の英語力が伸びた、と言える結果が示された。しかし、帰国後の TOEIC では、たしかに、リスニング、リーディング、合計ともにスコアを伸ばしてはいるものの、ヨーロッパ地域で言語運用能力の評価基準として使われている CEFR に照らし合わせてみると、まだまだ発展途上であり、今後の努力が期待される場所である。また、リーディングの力の無さは本学部の学生全体の傾向とも考えられ、学生たちが英語を学ぶ際、注力して学ぶべき技能であることも明らかになった。

## 2 留学先別 TOEIC の各項目に見られる英語力の変化——選抜時と帰国後——

本項は、選抜時（2013 年 12 月）と帰国後（2015 年 5 月）に受験した TOEIC の各項目に見られる英語力の変化を、留学先別に統計的に分析し、議論することを目的とする。まず、選抜時の TOEIC のスコアを留学先別に集計し、報告する。その後、帰国後の TOEIC のスコアを留学先別に集計し、報告する。その際、留学先間に有意差がないかを検証するために分散分析 [ANOVA] を実施する。また、分散分析の結果、留学先間に有意な差が認められた場合、どこにその差が存在するのかを特定するために Tukey 検定を行う。こうした統計的に求められた結果をもとに、留学先別の英語力の変化について議論を行う。

表 4. は、選抜時の TOEIC の各項目別のスコアを、留学先別にまとめたものである。リスニングの留学先別の平均値の最大値は E 校の 320.00 点、最小値は B 校の 256.25 点であった。その差、63.75 点であった。リーディングの留学先別の平均値の最大値は C 校の 235.00 点、最小値は B 校の 177.50 点であった。その差、57.5 点であった。合計の留学先別の平均値の最大値は E 校の 550.00 点、最小値は B 校の 433.75 点であった。その差、116.25 点であった。各項目とも、最大値と最小値との間には大きな得点差のあることが確認できる。つまり、選抜段階において、留学先により、TOEIC の各項目には数値として差のあることが目視される。

表4. 選抜時の留学先別 TOEIC の各項目別結果<sup>9)</sup>

留学先		選抜時		
		リスニング	リーディング	合計
A校	平均値	313.33	203.33	516.67
	標準偏差	33.116	41.553	53.821
B校	平均値	256.25	177.50	433.75
	標準偏差	23.936	17.078	14.361
C校	平均値	306.00	235.00	541.00
	標準偏差	12.942	47.170	41.743
D校	平均値	260.83	195.00	455.83
	標準偏差	26.157	30.822	35.414
E校	平均値	320.00	230.00	550.00
	標準偏差	43.205	53.697	66.458
合計	平均値	291.20	207.80	499.00
	標準偏差	38.004	41.959	61.543

(N=25)

しかし、こうした各留学先間に目視される得点差には、統計的にも有意と言えるだけの差があるのかを検証するために、分散分析 [ANOVA] を行った (表 5.)。その結果、リスニングと合計の 2 項目において、有意な差の存在が確認された、リスニング :  $F(4, 20) = 5.260, p = .005, \text{est } \omega^2 = .513$ ; 総合計 :  $F(4, 20) = 5.927, p = .003, \text{est } \omega^2 = .542$ 。しかし、リーディングに関しては有意な差は確認されなかった、リーディング :  $F(4, 20) = 1.642, p = .203, \text{est } \omega^2 = .247, n.s.$ 。つまり、選抜の段階において、リスニングには留学先間に力の差は存在していたということである。しかし、リーディングに関しては留学先間に力の差はなかった、と言える結果が示された。

表5. 選抜時における留学先別 TOEIC の各項目別分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	
選抜時 先	リスニング * 留学	グループ間 (結合)	17771.083	4	4442.771	5.260	.005
		グループ内	16892.917	20	844.646		
		合計	34664.000	24			
選抜時 先	リーディング * 留学先	グループ間 (結合)	10445.667	4	2611.417	1.642	.203
		グループ内	31808.333	20	1590.417		
		合計	42254.000	24			
選抜時 先	合計 * 留学先	グループ間 (結合)	49307.083	4	12326.771	5.927	.003
		グループ内	41592.917	20	2079.646		
		合計	90900.000	24			

こうした分散分析の結果を受け、いずれの留学先間に、統計的にも有意と言える差があったのかを検証するため、Tukey 検定を実施した。その結果、リスニングに関してはA校とB校,  $SE = 18.760, p < .05, 95\% \text{ CI } [7.82, 121.68]$ 、A校とD校,  $SE = 16.779, p < .05, 95\% \text{ CI } [8.78,$

<sup>9)</sup>各留学先別の度数 (n) については、学校名が特定されることを考慮し掲載していない。

111.55]、E校とB校、SE = 19.954,  $p < .05$ , 95% CI [3.75, 123.75]、E校とD校、SE = 18.215,  $p < .05$ , 95% CI [4.39, 113.94] に統計的にも有意と言える差のあることが確認された。また、合計に関してはC校とB校、SE = 30.592,  $p < .05$ , 95% CI [13.05, 201.45]、C校とD校、SE = 27.614,  $p < .05$ , 95% CI [.14, 170.20]、E校とB校、SE = 33.019,  $p < .05$ , 95% CI [16.96, 215.54]、E校とD校、SE = 30.142,  $p < .05$ , 95% CI [3.52, 184.81] の間に統計的に有意な差のあることが確認された。

次に、帰国後に受験した TOEIC の各項目別スコアを、留学先別に検討する(表6.)。帰国後のリスニングの最大値はC校の385.00点、最小値はB校の333.75点であった。その差、51.25点であった。リーディングの最大値はC校の340.00点、最小値はD校の305.00点であった。その差、35.00点であった。合計の最大値はC校の725.00点、最小値はB校の611.25点であった。その差、113.75点であった。各項目とも、目視で確認される数値の最大値と最小値との間には得点差のあることがわかる。

表6. 帰国後の留学先別 TOEIC の各項目別結果<sup>10)11)</sup>

留学先	帰国後			
	リスニング	リーディング	合計	
A校	平均値	381.67	315.83	697.50
	標準偏差	40.332	58.857	94.008
B校	平均値	333.75	277.50	611.25
	標準偏差	36.372	27.839	53.444
C校	平均値	385.00	340.00	725.00
	標準偏差	34.460	31.820	49.117
D校	平均値	374.17	305.00	679.17
	標準偏差	20.595	56.833	52.098
E校	平均値	365.00	306.25	671.25
	標準偏差	12.247	17.500	23.585
合計	平均値	370.20	310.40	680.60
	標準偏差	33.432	45.596	67.335

(N=25)

しかし、こうした各留学先間に見られる得点差には、統計的にも有意と言えるだけの差があるのかを検証するために、分散分析 [ANOVA] を行った(表7.)。その結果、リスニング、リーディング、合計点のすべての項目において有意な差は発見されなかった、リスニング :  $F(4, 20) = 1.905, p = .149, \text{est } \omega^2 = .276, n.s.$  ; リーディング :  $F(4, 20) = 1.120, p = .375, \text{est } \omega^2 = .183, n.s.$  ; 合計 :  $F(4, 20) = 2.007, p = .132, \text{est } \omega^2 = .286, n.s.$ 。つまり、A校からE校に至るまで、リスニング、リーディング、合計ともに留学先間による差はない、と言える結果であった。

<sup>10)</sup> 選抜時より標準偏差の値が小さくなったものにはマーカーをつけた。

<sup>11)</sup> 各留学先別の度数 (n) については、学校名が特定されることを考慮し掲載していない。

表7. 帰国後の留学先別 TOEIC の各項目別分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
帰国後 リスニング	グループ間 (結合)	7401.083	4	1850.271	1.905	.149
	* 留学先 グループ内	19422.917	20	971.146		
	合計	26824.000	24			
帰国後 リーディング	グループ間 (結合)	9131.417	4	2282.854	1.120	.375
	* 留学先 グループ内	40764.583	20	2038.229		
	合計	49896.000	24			
帰国後 合計 * 留学先	グループ間 (結合)	31170.167	4	7792.542	2.007	.132
	グループ内	77645.833	20	3882.292		
	合計	108816.000	24			

本項では、選抜時（2013年12月）と帰国後（2015年5月）に受験した TOEIC の各項目に見られる英語力の変化を、留学先別に統計的に分析し、議論してきた。その結果、選抜段階において、リスニングと合計のスコアには、留学先により隔たりのあることが確認された。また、その差がどこに生じているのかを特定するために Tukey 検定を実施したところ、留学先間のどこに有意な差が存在しているのかも確認できた。その後、帰国後の TOEIC のスコアを留学先別に集計し、その結果を分散分析 [ANOVA] したところ、すべての項目において、留学先間に有意な差の存在は確認されなかった。選抜の段階では各留学先により、英語力、特にリスニング力と合計に有意な差が認められたが、6-7か月間、各大学併設の語学学校で英語を学ぶことにより、留学先に関係なく英語の各技能をみな同じ程度にまで力をつけた、と判断できる結果が示された。

### 3 TOEIC の各項目の伸び——選抜時と帰国後——

本項では、13 期生全体の TOEIC スコアの各項目の伸びと留学先別の TOEIC スコアの各項目の伸びの 2 側面から集計を行い、議論する。以下の表は、留学先別に TOEIC スコアの各項目の伸びを示したものである（表 8.）。リスニングスコアの平均値として最も大きく伸ばしたのは D 校の 113.33 点、逆に平均値の伸びが最も小さかったのは E 校の 45.00 点であった。その差、68.33 点であった。次に、リーディングスコアの平均値として最も大きく伸ばしたのは A 校の 112.50 点であった。逆に、平均値の伸びが最も小さかったのは E 校の 76.25 点であった。その差、36.25 点であった。最後に、合計スコアの平均値で伸びが最も大きかったのは D 校の 223.33 点、最も伸びが小さかったのは E 校の 121.25 点であった。その差、102.08 点であった。数値としては、明らかに差のあることが目視できる。

表8. 選抜時と帰国後の TOEIC に見られる各項目の伸び<sup>12)</sup>

留学先		選抜時と帰国後		
		リスニング	リーディング	合計
A校	平均値	68.33	112.50	180.83
	標準偏差	24.427	37.517	55.625
B校	平均値	77.50	100.00	177.50
	標準偏差	22.174	38.079	56.051
C校	平均値	79.00	105.00	184.00
	標準偏差	40.373	44.441	24.597
D校	平均値	113.33	110.00	223.33
	標準偏差	31.411	54.129	36.009
E校	平均値	45.00	76.25	121.25
	標準偏差	44.159	61.288	67.992
合計	平均値	79.00	102.60	181.60
	標準偏差	37.722	45.165	55.070

(N=25)

留学先別の伸びに見られるこうした数値上の差は、統計的にも有意であるのかを検証するために分散分析 [ANOVA] を実施した。その結果が、以下の表 9. である。

表9. 選抜時と帰国後の TOEIC に見られる各項目の伸びの分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
選抜時と帰国後の差 リスニング * 留学先	グループ間 (結合)	12388.333	4	3097.083	2.846	.051
	グループ内	21761.667	20	1088.083		
	合計	34150.000	24			
選抜時と帰国後の差 リーディング * 留学先	グループ間 (結合)	3749.750	4	937.438	.415	.796
	グループ内	45206.250	20	2260.313		
	合計	48956.000	24			
選抜時と帰国後の差 合計 * 留学先	グループ間 (結合)	25118.083	4	6279.521	2.635	.065
	グループ内	47667.917	20	2383.396		
	合計	72786.000	24			

リスニング、リーディング、合計のすべての項目にわたって有意な差は発見されなかった、リスニング :  $F(4, 20) = 2.846, p = .051, \text{est } \omega^2 = .363, n.s.$  ; リーディング :  $F(4, 20) = 0.415, p = .796, \text{est } \omega^2 = .077, n.s.$  ; 合計 :  $F(4, 20) = 2.635, p = .065, \text{est } \omega^2 = .345, n.s.$  。つまり、A校からE校に至るまで、リスニング、リーディング、合計ともに留学先間による英語力の伸び方に差はなかった、と言える結果であった。

本項では、13期生全体の TOEIC スコアの各項目の伸びと留学先別の TOEIC スコアの各項目の伸びの2側面から集計を行い、議論を行った。その結果、数値としては、留学先により TOEIC スコアの各項目の伸び方に差があるように目視されるが、分散分析 [ANOVA] を実施したところ、留学先による TOEIC スコアの各項目の伸び方に有意な差の

<sup>12)</sup> 各留学先別の度数 (n) については、学校名が特定されることを考慮し掲載していない。



存在は確認されなかった。つまり、留学先による英語力の伸び方に差はなかった、ということである。

#### 4 選抜時と帰国後の TOEIC のスコアに見られる相関

本項では、選抜時（2013年12月）と帰国後（2015年5月）の TOEIC のスコアに見られる、対応する各項目間の相関性について議論する。以下に示す表 10. は選抜時と帰国後に受験した TOEIC の各項目間の相関係数（ $r$ ：ピアソン積率相関係数、以下、本項でいう相関係数とはピアソン積率相関係数のことを指す）を求めたものである。

表10. 選抜時と帰国後のTOEICのスコアに見られる相関

	1	2	3	4	5	6
1. 選抜時 リスニング	—	.183	.742**	.448*	.396	.491*
2. 選抜時 リーディング		—	.795**	.349	.470*	.492*
3. 選抜時 合計			—	.514**	.565**	.638**
4. 帰国後 リスニング				—	.439*	.794**
5. 帰国後 リーディング					—	.895**
6. 帰国後 合計						—

$p < .01$ \*\*（両側）； $p < .05$ \*（両側）

選抜時と帰国後の TOEIC の対応する各項目間の相関係数は以下のとおりであった：リスニング  $r = .448$ \*；リーディング  $r = .470$ \*；合計  $r = .638$ \*\*（\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ ）。対応するすべての項目間に「比較的強い相関がある（ $\pm .40 < r < \pm .70$ ）<sup>13)</sup>」という数値が示された。また、そのすべてにおいて、5%もしくは1%水準で有意であることが示された。つまり、選抜時の TOEIC で高得点であった者は、帰国後の TOEIC でも高得点を収める傾向にあり、その逆もまた真なり、と言える結果が示された。

この点については、笠原（2011）が中期留学の英語力の測定に TOEIC が使われるようになった 6 期生以降の全データを用い、分析と議論を行っているが、その結果、TOEIC のそれぞれ対応する項目同士の相関係数は以下のとおりであった：リスニング  $r = .465$ \*\*；リーディング  $r = .486$ \*\*；合計  $r = .567$ \*\*（\*\* $p < .01$ ）。また、13 期生の結果と同様、これらのすべての項目において「比較的強い相関がある（ $\pm .40 < r < \pm .70$ ）」という結果が示されている。そして、そのすべてにおいて、1%水準で有意であることが示されている。つまり、留学出発前の英語力が留学という学びの過程において、英語力がどれだけ大きく伸びるかを左右する要因のひとつになっている、と言えそうである。英語は留学に行ってから学ぶものではなく、行く前に確固たる基礎力をつけておくことにより、より高いレベルの英語力を留学先での学びを通して獲得することができるのである。

<sup>13)</sup> 相関の程度を表す日本語の表現および該当の相関係数の適用範囲の基準は、岩淵 et al. (1999) に従った。

本項では、選抜時（2013年12月）と帰国後（2015年5月）のTOEICのスコアに見られる相関性について議論してきた。その結果、TOEICのそれぞれ対応する項目に関しては、「比較的強い相関がある（ $\pm.40 < r < \pm.70$ ）」という結果が示された。しかし、こうした傾向は13期生だけに見られるものではなく、笠原（2011）が、TOEICが中期留学生の選抜時と帰国後の英語力の伸長の程度を測定するのに使われるようになった6期生から9期生までの4か年分のデータを利用し、分析した結果から、同様の結論を導いている。

## 5 おわりに

---

本稿では、13期生の選抜時と帰国後の英語力の変化を、中期留学の選抜時に使ったTOEIC（2013年12月）と学生たちが帰国後の2015年5月に受験したTOEICのスコアを分析することにより、さまざまな観点から議論を行ってきた。最初に、選抜時と帰国後のTOEICスコアの各項目別平均値を分析し、13期生の全体的な傾向を把握した。その結果、リスニング、リーディング、合計ともに、数値として選抜時よりも帰国後の方がTOEICのスコアが伸びていることが目視されている。また、そうした数値が統計的にも明らかにスコアが伸びていると言えるのかを測るため、*t*検定を実施した。その結果、両者には有意な差のあることが確認された。つまり、TOEICという英語力を測定するテストの基準においてではあるが、たしかにスコアは伸びた（英語力が伸びた）、と言える結果が示された。

次に、中期留学（英語圏）協定校5校の留学先別に、TOEICのスコアに見られる変化を、項目別スコアとその伸びの両面から13期生の英語力について議論した。その結果、選抜段階においては、留学先により、TOEICのリスニングと合計のスコアに有意な隔たりのあることが確認された。その詳細については「2 留学先別 TOEIC の各項目に見られる英語力の変化——選抜時と帰国後——」を参照していただきたい。帰国後のTOEICについても同様に分析したが、すべての項目において留学先間に有意な差は確認されなかった。これは6-7か月の期間、各大学併設の語学学校で英語をみっちり学ぶことにより、留学先に関係なく英語の各技能（学生たちが受験したTOEICではリスニングとリーディングの2側面）をみな同程度にまで力をつけた、と判断できる結果が示された。

3点目に、選抜時と帰国後のTOEICスコアの各項目の伸びに着目し、13期生の全体と各留学先別に分析を行った。その結果、13期生全体としては、リスニングに関しては平均79.00点、リーディングに関しては平均102.60点、合計に関しては平均181.60点の伸びが目視された。また、留学先別の各項目スコアの伸びに関しては、リスニングの最大値は113.33点、最小値は45.00点；リーディングの最大値は112.50点、最小値は76.25点；合計の最大値は223.33点、最小値は121.25点であった。留学先個別の具体的な数値に関しては「3 TOEIC の各項目の伸び——選抜時と帰国後——」を参照していただきたい。こ

うした留学先個別の TOEIC の各項目スコアの伸びに対して分散分析 [ANOVA] を実施したところ、有意な差は確認されなかった。つまり、留学先による TOEIC のスコアの伸び方に差はなかった、という結果が示された。

最後に、選抜時の TOEIC の各項目のスコアと帰国後の TOEIC の各項目のスコアの間に見られる相関について議論した。その結果、選抜時と帰国後の TOEIC において、それぞれ対応する項目（技能）の相関は、比較的強い相関にあることが示された：リスニング  $r = .448^*$ ；リーディング  $r = .470^*$ ；合計  $r = .638^{**}$ 。また、それらのすべてにおいて、5%もしくは 1%水準で有意であることが示された ( $*p < .05$ ,  $**p < .01$ )。この結果は、笠原 (2011) が 6 期生から 9 期生までの、4 か年分のデータを用いて求めた結果と合致するところである。つまり、留学前の英語力がどの程度のレベルにあるかが、留学中の英語力の伸びと強い連関があると言える。このことが改めて確認される結果であった。

本稿では、13 期生の選抜時と帰国後の TOEIC のスコアを分析対象として、選抜時と帰国後の英語力の分析を行ったが、外国語である英語の習得の程度やその伸び方には、単に海外留学した（長期にわたり海外に行った・海外で長期にわたって生活してきた・語学学校で集中的に英語を勉強した）ということだけがその原因・理由ではなく、対象者の英語に対する興味・関心の強さや英語をモノにしたい！このレベルの英語力を身につけたい！というモチベーション（動機）の強さや高さ、留学期間中の日常生活の過ごし方（たとえば、マイナスの影響として考えられるものとして、現地で知り合った日本人とばかり行動を共にしていた、日本にいる友人たちと Facebook や LINE などの SNS やメールでのやり取りに始終日本語ばかり使っていた、インターネットで日本語のサイトばかり閲覧していた等々<sup>14)</sup>）なども英語力獲得の程度に影響を及ぼす要因と考えられる。例年、帰国後の TOEIC を受験する際、留学満足度調査のアンケートを同時に実施しているが、それに上述のような観点（興味・関心・動機・日常生活の様子など）を組み入れ、TOEIC のスコアとの関係から包括的、探査的に英語力の変化を分析してみる価値があるのではないかと考えている。

## 6 引用文献

---

EST TOEIC, TOEIC テストとは Retrieved from <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/what.html>

EST TOEIC, IP テスト（団体特別受験制度）はどんな制度なのか？ 団体ならではのサービス よくある質問 Retrieved from <http://www.toEIC.or.jp/corpo/faq/before01.html>

---

<sup>14)</sup> 中根 (2010) が指摘する「日本文化への逃避組」(p.54) である。「日本文化への逃避組」とは、異文化で生活しているにもかかわらず、社会生活の大部分が日本の文化ルールで占められている（通用する）ような生活をしている一場所が海外に移っただけで、やっていることは日本にいるのと何ら変わらないような生活をしている一日本人やその集団を指す。

EST TOEIC, 企業が期待する TOEIC スコアとビジネスパーソンの平均スコア Retrieved from <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html>

EST TOEIC, TOEIC プログラム各スコアと CEFR レベルの比較表 Retrieved from <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html>

岩淵千明編著 浦光博・石井滋・西田公昭・神山貴弥 (1999) 『あなたもできるデータの処理と解析』福村出版

笠原正秀 (2011) 2009 年度中期留学 第 8 期生の選抜時と帰国後の英語力の変化『2009 年度 中期留学報告書』(pp.31-38). 梶山女学園大学 国際コミュニケーション学部

中根千枝 (2010) 『適応の条件—日本的連続の思考—』講談社新書